高齢者のライフレビューにおける＜もの語り＞をめぐる物語

－心的世界と現実、語り手と聴き手を繋ぐ媒体として－

林　智一
(香川大学医学部)

目的

Butler(1963)は、高齢者やターミナル期の患者など死を意識した人々に見られる人生の回顧（ライフレビュー）が適応的に進展した場合、高齢期の心理社会的危機である「自我の統合性　対　絶望」(Erikson, 1963)の解決に向かわせると述べた。

また黒川(2013)は、認知症者のセラピーにおいて「モノが、言葉を補完し、記憶の空白を埋め、過去とのチャンネルをつなぎ、他者との関係を回復させるための鍵となる」という。

筆者は、研究としてのライフレビューを実施し、その分析を重ねる中で、高齢者がライフレビューにおいてモノについて語ること、すなわち＜もの語り＞の意義を実感させられる場面に出会ってきた。さらには、実際のモノが面接に持ち込まれることもあった。本研究では、ライフレビューにおいてモノについて語ること、すなわち＜もの語り＞の意味について考察する。

方法

研究協力者は、現在、認知症やうつ病などの精神疾患がなく、ある程度の言語化能力を有する、心理的健康度の高い介護老人保健施設利用者であった。回数を 5 回ないし 10 回と定めたライフレビューをもとに、高齢者の＜もの語り＞の意味について整理、検討した。

結果と考察

1．ライフレビューを活性化する触媒として

ライフレビューは想起、評価、綜合の 3 つの要因からなるが(Webster & Young, 1988)、モノはライフレビューを活性化するための触媒として機能すると考えられる。

Butler(1963)は、ライフレビューにおいて音楽や写真、家系図などを利用する場合があると述べている。また視覚、聴覚、触覚、味覚・嗅覚が回想を刺激すると言われる（野村, 1998）。このようにモノは、記憶を呼び起こす想起の段階で有用となる。さらに想起された記憶の価値判断の段階である評価においても、洞察による記憶の修正や追加的な記憶の促進材料となりうる。そして否定的観念と肯定的観念のバランスが問われる綜合の段階でも、肯定的な思い出に関わるモノであれば、そこに確固として存在するモノが“物証”として肯定的観念を裏打ちしてくれる。

2．人生の物語を今、ここで共有するために

ある女性高齢者は、「水泳が趣味だったので、死んだら水泳用のゴーグルをお棺に入れてね」と子どもに伝えていると語った。ゴーグルというモノについて語る中で、人生における楽しみや生きがいについて振り返り、やがて来る自身の死について思いをはせ、覚悟を決めていくプロセスが感じられた。

このように抽象的、観念的になりがちなテーマも、リアルなモノを媒体とすることで詳細かつ具体的な迫力を持って聴き手に伝わり、理解されやすくなる。これは、聴き手に対して、自分の人生の物語やそれにまつわる思いを正確に伝えたい、深く理解してもらいたいという語り手のモチベーションがあればこそのように思われる。

3．心的世界と現実の接点として

モノは、語り手の思い出やそれにまつわる心情などの心的世界と、今、ここにあるリアルな現実とを繋ぐ接点ともなる。また、両者のつながりを聴き手に対しても実感させてくれるものである。

ある男性高齢者は、従軍して海外の前線で戦ったことを「無銭の海外旅行です」と冒険譚のように語った。しかし聴き手には、激戦地であり、過酷で悲惨な体験のようにも感じられ、違和感を覚えた。次回に、兵隊手帳を持参され、戦時中や戦後の語り手の人生について、詳細な話が展開された。それにより聴き手は、自身の戦争に対する一面的なイメージが語り手に対する適切な理解を妨げていたことに気づくことができた。このようにモノは、語り手と聴き手を繋ぐ媒体ともなる。

【科研費基盤研究(C)17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき―奏功機序の解明と技法論の構築に向けて―』（研究代表: 林　智一）】